

は？儂がメス堕ちなん  
ぞするわけないじゃ  
ろ？～TS転生ロリババ  
アのメス堕ちカウント  
ダウン～

ざっはとるて。

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

好きなものを全部入れました。

# 目次

3 話	2 話	1 話
18	12	1



## 1話

しがない前世が唐突に終わり、この世界に生まれ落ちてから数百年。森で暮らす妖狐の一族として産まれたお陰でコンクリートの建物なんぞひとつもない中でも違和感を覚えることなく生活できていた。

本能か何なのか郷愁はあっても都会へ出たいなどは微塵も思わなくて、とにかく生きていくこと自体は案外問題ではなかった。問題となったのは、ずばりこの肉体そのものじゃった。

まずひとつには、過ぎるほどに強大な身体スペック。日本人的価値観で行けば妖狐なんて御大層な雰囲気を感じるが、実際のところ神秘的な存在に溢れたこの世界においてはちよつとした特技を持った狐の群れという感じに等しく人間の姿を取れる仲間もほとんどおらんかった。その中であつて当然のように人間態を持ち、しかも気力・体力・妖力が成長と共に際限なく跳ね上がっていった儂は妖狐として確実に異端じゃった。

そして最大の問題、それは……この童女の様な外見じゃ。前世が男であつた身としてはまず女の子という時点で動揺するのに十分な情報で、自分は本当に自分が意識してい

る通りの存在なのかという点では本当に大変な苦勞を強いられたのじゃ。前世では鏡を見る度に慣れ親しんでいたシケた面が、今生では川原の水面に見たこともない女の子が映っていると来れば心穏やかではいられぬ。今となつてはこの見た目で過ごした時間の方が長いので違和感なぞ抱きようもないが、かつては自分の頭が果たして確かなのだろうかと子供心（幼心、とは言うまい）に不安に思つたものじゃつた。

しかもこの体、ある時期からびたつと成長が止まつてしまひおつた。周囲は立派な成人（成狐？）になつていくのに対して儂は獣の姿も人間の姿も子供のままと来た。おまけに寿命までもが突出していたらしく、親兄弟や一緒に遊んだ友が儂より先に老いて死んでいくというのに、儂だけが幼子の姿のまま老いず、衰えず、力だけは膨れ上がつていき、群れでの異端性を高めていく。こんな存在を特別扱いしない理由はないじやろう。実際、同族達はこう考え始めた。儂のことを、一族が覇権を握るためにご先祖さま達が遣わした神狐だと。

最初は同族の想いを無下にも出来んからと黙つて御輿として担がれていたが、儂の圧倒的な力を見て周囲が増長を抑えきれなくなり遂には他の魔物も人間も全て滅ぼしてしまふなどと抜かし始めたものだからいよいよ耐えきれなくなつて故郷を離れたのが大体200年前のことである。気が付けば、儂は普通に考えて普通に喋つてるつもりなのに自分が産まれた頃の言葉遣いが古臭い、時代錯誤な口調扱いされてしまうほどの時



「これはまた、大きな果物が落ちてたもんじや……」

おのこである。それも全身傷だらけ、纏った衣服は仕立てだけは良さそうにも見えるが穴ボコの血まみれで目もあてられない有り様じや。

微かに胸が上下しており、幸い息はある。とは言え素人目にすら放置していれば次の朝日を待たず死にかねない状態に見えるのだから放つてはおけん。

「見付けたのが儂で良かったのう。そら、今治してやるから死ぬでないぞ〜」

とりあえずは怪我を癒すべく術をかけてやる。妖狐らしく狐火で森ごと焼き払ったりに逆に周囲一帯を大瀑布で飲み込んだりとおよそファンタジーっぽいことなら大概使うことが出来るこの体なら、治療魔術程度は朝飯前である。その気になれば死者だって呼び戻せる……と思う。ちよいと気味が悪いのでやったことはありやせんが。

回復魔法をかける傍ら、ぴいつ。と指笛を吹き一頭の熊を呼びつける。見かけはただの恐ろしい猛獣だが、こやつが幼い頃から面倒を見てやったお陰で大層懐いている、姉弟分のようなものである。名前をつけようかと思つたこともあつたが、別に儂の愛玩動物というわけでもなし、親熊がつけた本当の名前もあつたりするかもしれないと考えると何だか申し訳が立たぬということで専ら音やなんかの合図で呼びつけている。



「よしよし、よー来てくれたの。悪いがこやつを家まで運んでくれ……んく？お人好しで結構結構、それで人命が助かるんならもう」

妖狐という、かなり動物寄りの種族のお陰で森の動物の言いたいことは凡そ理解できる。どつちかと言えれば肉食気質なのに、意思が伝わるお陰で動物をとって喰おうと思えるのが玉に瑕じゃが。

「ひゃー、冷たっ」

熊の背に乗せるべくおのこを担ぎ上げると、人体とは思えんくらい体が冷え込んだのが分かる。そりゃあ服全体がどす黒く染まっっているくらいじゃから血を相当失ってる筈で、怪我自体の治療だけでは処置が足りんのは当然である。

とりあえずは纏っていた簡素な外套を被せてやる。熊の体温と合わせて多少は暖まることじやろう。

「後は火をおこして、綺麗な水を作って……儂は先に行くゆえ、しつかり連れて来るんじやよ」

おのこの運搬を熊に任せて家へ疾走する。病人を乗せたまま熊を走らせるわけにもいかぬし、それに熊めは甘やかしすぎて最近肥え気味なのでいい運動とでも思ってもらおう。

音を置き去りにしそうな速さで自宅へ戻る。すかさず、ガタついた竈の上に岩場から

切り出して作った鍋を置き、汲み置きしていた水をそこへあけた。

「さあ、仕事じゃよ可愛い可愛い眷族達」

儂の手から生まれた火が狐の形をとり、踊るように鍋を取り囲む。台所作業に使う度抗議の視線を向けてくるが相手にはしない。調理ぐらいにしか使い道がないほど世の中が平和だつて証拠じやろうが、文句言うでないわ全く。

軽く湯気が立ち始め、部屋に暖かい空気が充滿した頃、戸をかりかりとひつかく音がした。熊めもしつかり頼みを果たしてくれたようじゃ。後で褒美をやらねばならんの。

「よしよし、よく連れてきてくれたのう！今日は帰つて休むがよいぞ」

少しだけ甘えるように儂に頭を擦り付け、熊は帰つていった。十分に暖まった部屋におのこを迎え入れ、寝床に置いて安静にさせてやった。

「さて、このままにしておくわけにはいかんしの」

少し熱めくらいに沸いた湯に布切れを浸け、おのこの体を拭いていく。既に傷は塞がっているので感染症の心配は要らぬのだが、やはり怪我人を血と泥にまみれさせておくというのは気が引ける。

「よく見れば本当に全くの子供ではないか……一体何がどうしてこんな目に遭つてしまったのだか」

血で固まった前髪を解きほぐしながら搔き上げると現れた蒼白な顔面は10かそこ

らの幼子にしか見えぬ。洗い清めればきつと朝日に美しく輝くであろう金の髪色とそれに相応しく整った顔立ちと合わせ、おなごと見間違いかねない容姿である。

「……その割に体のつくりはしつかりしとるの」

肩や腰元に手を遣ると、幼さゆえに成長途上であることは感じられるが贅肉は少なく筋が発達しており外見に似合わず洗練された肉体である。今は弱つていてそれどころではなからうが、きつと本来はとても頼り甲斐のあるおのこなのじやろうな。

「では最後の仕上げに、と」

この粗末な小屋に置かれているのは前世であったような上等な寝具では勿論なく、こんなところに寝転がされたからといってこの重傷者は回復しないだろう。おのこの横つちよに寝転んで体をぎゅつと抱き締め、左手に発火まで至らぬ程度の陽の気を籠めて体を暖めつつ右手にほんの僅かな回復の術を発現させてじつくりと体を癒していく。後はこの子の体力次第というところだ。

暫しそのまま治療を続けてやると、少しずつ体の震えは収まってきた。このままゆっくり休めば元気澆刺とは言わんまでもひとまず生きてくのに問題ない程度には回復することじやろう。

「くわあ……一仕事終えたら儂まで眠くなってきたわ。このまま儂も一眠りするとしようかの」

上着を脱いで肌着だけになり、おのこを僅かばかり強く抱き締めて眠る態勢に入る。うむうむ、体格が同じくらいだからか収まりが良くていい感じじゃ。このまま寝落ちしたとしても、鍋にかけてばなしの狐火がボヤを起こしたりかける術の加減を間違うようなことはこの体に限ってあり得ないので心配御無用。この子が目覚めたら最初の食事は何がええじやろなとぼんやり考えつつ、瞼を閉じるのじやった。



夢を見た。

男の姿があつた。肌は青く、尖つた耳が特徴的な魔族の男だ。男がこちらを見ながら口を開いた。男の姿が遠くなる。そしてその場を光が――

「うわああああああああつ！だ、誰っ!?!」

「ふおお!?!なんじゃあつ!?!」

呑気に眠っていたところを叩き起こされて尻尾が総毛立つ。すわ敵襲かと狐火を呼び出そうとして、違和感。何故既に手から火と治癒の術が発動しておる？一瞬考えた

ところで、目を白黒させてこちらを見るおのこが目に入ったことで状況を飲み込めた。

「おおく……まさかもうそんなに元気になつるとは、善き哉善き哉」

後ずさろうとするおのこを強引に引き寄せ、頭を撫で付ける。うむうむ、やはり収まりがいいわい。

「あわ、あわわわわわわ」

一方おのこはまだ事態に頭が追いつかないのか意味のある言葉を発せていない。寝惚け頭ということもあるのじやろうか？

「ふふつ。全く、どうしたのじや？そのように顔を赤くして、言の葉も滅茶苦茶ではないか」

おのこの頬を両手で押さえて正面から目を合わせると、いよいよ視線すら合わせず右往左往といった様相である。一体何がどうしたのか改めて聞くと、唇をわなわなと震えさせながらも絞り出すようにこう返事があつた。

「ふくつ……!!服、ちゃんと着てよお!!」

「……んおく？」

言われて我が身を省みる。確かに、肌着しか纏っていないこの姿はまあ、一般的に見て「だらしががない」と言われるものじやろう。しかしだからと言ってこの反応は如何か？顔の前ではたばと手を振り真つ赤な顔を懸命に逸らすその有り様が示すところは、つ

まり。

「……にゅふふー！」

「わっ!?!」

にゆるん、と擬音が付きそうな滑らかな動きでおのこの懐まで踏み込む。口角が上が  
りっぱなしで止められない、これはつまり、つまりそういうことに違いあるまい。

「なんじやなんじやあゝっ? お主こおんなおばばの肌がそんなに嬉しいんかのお? 初々  
しいのう、可愛いのうゝゝゝゝっ」

「ひやあああああ!! や、やめてええええ」

……この体にはもうひとつ難点がある。からかい甲斐のある場面に出会すと、ついつい  
いどうにも我慢できなくなつてイタズラにイタズラを重ねてしまうのじゃった。

## 2話

後悔先に立たずという言葉がある。悔やむというのは必ず行動の後に来るものなので、当然のように行動する前から後悔などできよう筈もないのである。しかしながら、翻しては何か問題を起こしたならその反省を次に活かせということでもあり、則ち儂もまたその通りに振る舞うのであった。

「済まなかったのう、儂はどうにも一度楽しくなると夢中になつてしまふ性分だな……これくらいで詫びと言うのも全く恥ずかしい話じゃが、どうかこれでも食べて機嫌を直しておくれ」

おのこを卓につかせ、食事の用意をしつつ平謝り。本日の献立は先ほど採ったばかりの果物を使った焼きふるうつである。ズタボロの重症から回復したばかりでは腹に優しいものが良からうということ、じっくり熱してやわらかく仕上がった上にこんな調味料ひとつ手に入らない場所でもそれなりに美味しく作れるこいつはまさにうつつけといったところである。



「美味しそう……！いただきあぁ、あつあつちちち!!」

「あぁったわけ者！今の今まで火にかけていたものにそんながつつき方をする奴があるか?!しばし待てよ、今氷水を渡すぞな！」

指先から凍気を出し、湯飲みにあけた汲み置きの水へいくらかの氷を投下する。どんと勢いよく目の前に出せば、おのこはちやぶんと舌を浸けたのだった。普通ならお行儀悪を叱りつけるところであろうがこの急の事態では致し方あるまい、大目に見てやる。

「いふあい……」

「全く仕方のない子じやの……どれ、婆がふうふうしてやる故しばし待てよ」

匙を口許に近付けて一息、二息。妖術で丁度いい熱さに調整してやることも出来なくはないが、やはりそれでは風情がないのでこうしてきちんと息を吹き掛けてやるのが一番である。おのこからぼそぼそと『なにもそこまで……』という呟きが聞こえてきたが、またもや火傷をされても困るので無視をした。勿論、次の行動に対する異議もやはり却下するのであった。

「ほれ、あーんせよ、あーん」

「さ、さすがにそれは恥ずかしいと言うか……!」

「まあまあそうツレないことを言うでないわ。儂とてのう、自分の作ったものを食べて火傷になられてしまったらと思うと心が痛くてのー」

「うー……」

何事も、物は言いようである。言つてしまえば火傷なんぞいくらされても治癒の術をかけてやればどうにでもなるのじやが、治るのだから怪我をしてもいいということはあるまい。となれば儂が手伝つてやる他ないが、かと言つてそれを馬鹿正直に伝えればこやつくらいの子供は子供扱いをされたと思つて面白くないことじやろう。一步引いて、あくまで貴方のためですよという態度を示すことが寛容じや。

「お主が一人で食事も出来んような子供だなんて思つとりやせんがの、この婆にひとつ任せてはもらえんかの？」

「わ、分かつたよお……」

観念したらしく、おのこは大きく口を開けた。気恥ずかしさからか顔が赤くなつていゝるが、この程度の羞恥は治療の代金だと思つて甘受してもらおう。

釈然とはしない表情で『あーん』を受け入れたおのこの顔は、ふるうつを口に含んだ瞬間にぱつと華やいだ。

「お、おいしい……」

「そうじやろうとも！こんな森ではな、塩すら祿に手に入らぬ故料理など望むべくもないのじやが、これだけは兎角火を通せばよいので楽なものなんじやよ。ま、儂の得意料理と言つたところかの！」

「へえ〜……」

ぼやぼやとした返事をしながらおのこはまたぞろ口を開けた。たった2口目にして子供扱いへの抵抗感を失っているのはおのこが元々甘え上手なのか儂の口車に乗せられたのか甘味による衝撃があまりに大であったのか。何にせよ作った身としてはおのこに喜んで食べて貰えるのが一番じゃ。と言うわけで儂はおのこに次の一口を食べさせんがためにおのこのために調理した焼きふるうつを再び匙で掬っておのこの前に――

「……はて？ そう言えば、儂、お主の名前を聞いていなかったな？」

「もぐもぐ……あ、そうかも？」

よくもまあ今の今まで自己紹介をしていないことに気付かなかったものだと思つたが、よくよく思い出してみると互いの名前を聞く前におのこを抱き締めた阿呆に原因があると思ひ至つてしまったためその疑問は全力で儂の頭脳から追放することとした。

「それでは言い出しつぺの儂からじゃな。儂のことは『トワ』と呼ぶがよいぞ」

「僕の名前はね、ユウっていうんだよ！」

「ユウか。何とも勇ましそうでよい名前じゃの！」

「そ、そうかな？ えへへ……何だか照れるなあ」

ユウは肩をむずむずと動かして恥ずかしさを表現した。やはりおのこは素直に限る、

何と言つても世話のし甲斐があるというものである。

「ほれ、あーん。してユウよ、お主、出身はどこなのじゃ？」

「もぐつ。んぐんぐ……出身？ここがどの辺か分かんないけど、結構遠いんじゃないかなあ……何か気になるの？」

「そりや、いつまでもこんな山奥に置いておくわけにもいかんからの。そのうちお主の生まれ故郷へ帰してやらねばならんである」

「う……」

ユウの横顔に冷や汗の一滴。返答に窮する様子と合わせて、それはまさに痛いところを突かれた人間のお手本のような反応である。あまりにあからさまではあるがあまり見透かすような真似もよろしくないなので表情には出さず、口元を拭ってやりながら素知らぬ表情でユウの顔を覗き込む。

「えと、ぼ、ぼく、あんまり家に帰りたくなくて……」

そつぽを向いたわけではない、むしろちらちらとこちらを窺っているがよほど後ろめたい思いがあるために儂を直視できんというような振る舞いである。大体にしてこの歳の子があんな傷を負うような事態に陥るのだから、訳ありなのは火を見るより明らかなことではあったが……やはりその認識で間違いはないようじやった。

「えつ……つ？」

ふわり、と。腫れ物を扱うように優しく、しかし確かな親愛の情で以てユウを抱き締めた。

「何があつたかは聞かん。想像するだに、うんと辛い経験をしたのじやろう……心も、体も、うんと元気になるまでこの婆が面倒を見てやるでな。好きなだけここでゆつくりするがよかろ」

乾いた血で多少パリつく髪を軽く漉きながら頭を撫でる。遠慮がち、というかやもすれば拒絶の意思すらあつたユウは少しづつ儂の背に手を回し、やがて強く抱き返すと同時に、その涙腺を決壊させたのじやつた。

「よしよし、よしよし……沢山泣くがよい。泣いて泣いて、泣き止んだ時におのこは強く成長するのじやよ」

果たしてユウがどれだけの勢いで、どれほどの時間泣き続けたのか。それはまあ、彼の名誉のために伏せておくこととしよう。

### 3話

「そうじゃ、川に行こう」

「えっ?」

茹だるような暑さもなく、おニユーの水着など手に入れようがないため披露すべき何物かがあるわけでもないそんな森のど真ん中で呟かれた一言は、ずばり朝食での一幕がその端を発していたのだった。



——食材が、無い。

その日、儂が直面した事態とは当にそれじゃった。

儂の体は元々が妖狐であることに加え永い時間を生きすぎて体のつくりから普通の生き物とはがらりと変わってしまったようで、どういう食事を摂っても健康には凡そ影響しないようになっていた。はつきり言つて栄養自体よりも儂自身の娯楽という面の方が大きくすらあつたのじゃ。

それに対して、ユウの体はどうか。こんな幼気で成長期すら本格的に始まっていない少年に、儂が当たり前に行つていた食生活を真似させたらどんな未来が待っているのか恐ろしくて想像すら出来かねるといふものである。

そういうわけで儂は今まで森の中で採り貯めた食材（凍結の術のちよつとした応用で生み出した氷室に容れていた）を惜し気もなく放出してきたのじゃが、ここでひとつの問題が発生する。

つまるところ、蛋白質。

儂は妖狐という種族柄、森の動物達の意思がなんとなく分かってしまうがために肉を獲つて喰うという発想に今まで至れんでいた。儂だけが過ごしていくならば栄養バランスなんぞはどうでも構わないということで適当に木の実を喰っていたのだが、よもやここに来てそれが仇となるとは思わなんだ。

がしかし、いくらユウのためと言えど森の動物を殺めるあの瞬間に嫌でも知覚させられる、極限の恐怖と諦観が入り雑じつた感情を味わうのは辛いものがある。先日ユウを運んでもらった熊公の他にも、儂が食肉をしないからこそ良好な関係を築けている動物連中もいることじゃからのう。

昆虫食なら或いはどうか？ いやいや、本格的な養殖体制が整っているならまだしもその辺の虫を獲つて喰うだけではむしろ必要な栄養が欠けたり、そもそもユウめが拒否して食べられない可能性もある。

と、ここまで考えたところで儂の頭脳に電流走る。魚である。ここは森のど真ん中、海からは幾里離れているのやらといった位置だが当たり前のように川はある。川があればそこには何がある？ そう、魚が棲んでいる筈である。そう言えばユウの奴の体を拭いてやったりはしたが未だ水浴びは行っていない。妖術を使い熟した我が身はわざわざ清浄せずとも身綺麗に保てるということもあってユウの衛生状況は大して気にして





「ひゃ……ト、トワちゃん、一人で歩けるつてばあ」

トワちゃん、とはとりもなおさず儂のことである。室内にどう見ても複数人が住んでいる形跡はないので独り暮らしをしていることまでは理解してもらえたようじゃが、この見た目にして数百歳というのはさすがに脳が受け付けぬ情報であつたらしい。儂が見た目通りの年齢ではないと理解していないとしても別段不便があるわけではなし、むしろ近い年の頃と思つてもらつた方が変に距離を取られずに済むという利点もあるの  
で別に佳いか!と開き直つて現在に至つている。

「まあまあよいではないか、愛い奴めえ恥ずかしがつておるのかあ〜?」  
「わつ、や、やめてえ〜!」

頭を撫で遣り頬を捏ね遣り。あまりに弄り倒して嫌われてしまつては困るが、どうしてもこのイタズラだけがやめられない。思い返せば、前世ではペットを構いすぎて嫌われてしまう性分だつた気もする。儂のイタズラ好きはひよつとすると種族特性以上に儂自身の性分なのかもしれぬ。

「にゅふふ! すまんすまん、ユウの反応がどうしても可愛くてのう、ついついちよつかいを出してしまうわい。もうすぐ目的地に着くでな、しこたま楽しませてやるゆえ勘弁しておくれ?」

一旦距離を置き改めて手を差し伸べると、ユウは全くあつさりとその手をとつた。ど

うにもこやつ、一度何かを拒否した後に別の頼みごとをされると断りづらいという心理技法に大層弱い様である。将来的になんぞ悪い輩に騙されやしないものか心配になるバカ正直さじやが、今は儂のオモ……善き同居人としてその性情を存分に發揮して戴くこととしよう。

「目的地……ねえトワちゃん、川遊びつて、一体何するの？」

「……ほ？」

予想外の問いに思考が止まる。何なのと訊かれても川遊び也としか答えようがないのじやが、はて如何なる意図の問いなのじやろうか。

「だって、僕、そんなのしたことないんだもん」

「ほあ!？」

——目から鱗とはこのことか。娯楽などろくに無く、余暇があつても自然を相手に時を過ごすしかないのが当たり前のこの世界。且つ、前世よろしく公共事業なる概念に乏しく普通ならば水源のすぐ側にしか人が暮らせない状況下で、必然的に遊び場を川へ求めて然るべき。その認識に正面から横殴りを喰らわされたかのような衝撃（意味不明）を受け、混乱覚めやらぬといった儂の昼下がりである。

「えっ、いやいやユウよ、さすがにそれは嘘じやろう？お主のような年頃のおのが川遊びのひとつもしなかったというのかの？否さ例えばお主がとびっきりの箱入り息子で

あつたと言うならば或いは大事にされすぎてということもあるかもしれないが……」

そこまで口を滑らせて、咄嗟に鼻から顎までを手で覆う。このぼんずが訳有りなのは重々承知済みの今、生まれや故郷に繋がる話は禁句としていたというのに少し驚いたくらいで要らぬことを喋ってしまった。100年単位で他者と関わりを持つていなかった結果がこのザマか。ズケズケ何でも訊いてくる厄介なおばさんか、儂よ。

「あーあー、まあ、それはどうでもよいか。よいよい、知らぬというならこの儂が厭というほど教えてやるわい。なあに退屈も飽きもさせんとも、なにせこの森全てが儂の庭なのじゃからの！」

ぶわっはっはっはと大袈裟に空威張り。いや最早空笑いか。ともかくまたしても余計なことを口に出す前にさっさと行動、微かに聴こえるせせらぎを頼りに川へ川へと歩を進めていくのじゃった。